

5月30日 エフェソの信徒への手紙1章3～14節 今日の説教から

説教題：「三位一体ってどういう意味？」

今日は、まず簡単にパウロの宣教旅行について振り返ってみたいと思います。この紙の裏面に地図を印刷してあるので、見比べながら読み進んでください。パウロが第一回目の宣教旅行へと旅立った出来事は使徒言行録13～14章に記されています。イエス様の召しに答えて、パウロとバルナバはそれぞれの町の会堂へと向かい、ユダヤ人に向けて説教を始めます。旅の中で多くのユダヤ人から拒絶される事を通して、神様の御心が「異邦人に対する宣教」に向いていることをパウロは悟りました。

第2回目の宣教旅行は使徒言行録15章～18章に記されており、1回目と同じくアンティオキアから始まっています。最初の宣教旅行のときにできた教会を訪ねるために、パウロは小アジアへと向かいました。ガラテアで宣教した後、夢の中で神様からのお告げを受け、ギリシャへと方向を変えて、ヨーロッパへと福音を伝えました。フィリピでは霊を追い出したことからむちで打たれ、牢屋に入れられ、テサロニケでは会堂でイエス様を証しすることで多くの人々を信仰に導きました。アテネで行われていた偶像崇拜に憤慨し、そしてコリントでは長期間滞在しながら会堂で福音を語りました。

第3回目の宣教旅行はさらに数年後、使徒言行録19～21章に記されています。まずパウロはアンティオキアからエフェソに向かいました。パウロはその周辺の町で説教を繰り返し、また神様の力によって癒しの奇跡を示しました。多くの人々が、「エルサレムに行ってはいけない」「ユダヤ人に捕まってしまう」と心配する中で、それでもパウロはエルサレムへと向かいました。そこで、「ユダヤ人」「律法」「神殿」を軽んじたという罪でユダヤ人から追われ、ローマの兵士に捕らえられました。

今日の聖書箇所であるエフェソの信徒への手紙は、このローマに連れて行かれてから書かれたものであるとされています。この手紙の主なテーマは、「イエス様に従う人々の共同体をつくるのが、神様の意志に沿うものだ」ということです。福音がもたらす恵み、イエス様によって異邦人にもたらされた救い、そして、信じるものにあたえられる賜物はさまざまであっても共同体は一つである、ということについて語られています。様々な欲望や悪を避け、正しい生活によって教会を作り上げるように、と手紙の中で語られています。

このように、エフェソの信徒への手紙はどちらかという、特定の教会の問題を解決するための手紙というよりも、「すべての教会が読む」ことを前提としているような、広くイエス様の福音を伝えるような側面を持っています。だからこそ、今日の1章で示されているように、この手紙は「私たちが信じる神様がどのような存在なのか」という問題から語り始めています。

箇条書きにして説明すると、この紙の裏面の地図の下にあるように、三位一体の神様とは、「こういうものである」と説明するというよりも、「こうではない」としか説明できないような側面があります。私たちの物差しの中で「神様はこういう存在だ」と限定してしまうことは、「神様の限界を決める」ことに繋がってしまいます。神様は有限な存在でも、不可能なことがあるような存在でもありませんから、私たちはそのように「あからさまに違う」ことを排除することによって神様の存在を少しずつ理解することが出来るのです。

私たちは、一つの神様によって救いが約束されています。他にどんな並ぶ者もない、「唯一の神様」だからこそ、私たちが会おうどんな相手も、それは「神様が愛を注いでいる人物」です。私たちは、一つの神様に対して礼拝をしているのですから、様々な教義や様式の違いはあったとしても、すべてのキリスト者は「一つの教会」として神様を礼拝することが出来ます。そして、私たち教会は、父なる神様の救いの恵みに対して感謝をささげ、イエス様を頭としてみ言葉を受け、聖霊の力によって一つの教会として結び付けられることが出来ています。場所も、時代も、喋る言葉も違うかもしれませんが、私たちは神様へと思いを一つにして歩むことが出来るのです。その喜びを胸に、今週一週間も、これからの歩みも、共に進めましょう。